

滋賀県の河川は、周りの土地よりも川底が高い天井川が多いことから、堤防の決壊や浸水などの被害に見舞われやすく、過去から台風などの大雨により多くの水害が発生しています。

また、琵琶湖から流れ出る河川は瀬田川のみであり、琵琶湖周辺では古くから長期間にわたる浸水被害に悩まされてきました。

1. 琵琶湖流域の特性

滋賀県は周囲に県境をなす山地が連続しており、ほぼ中央に位置する琵琶湖を中心として、流入する多くの河川により形成された沖積平野が広がった盆地となっています。このため、県内の河川は、山間部を流れる上流部では急勾配で、中流域では大量の土砂流出により天井川を形成していることが多く、特に山間部で大雨が降ると、一気に出水しやすく、中下流部で氾濫した場合には、広範囲で浸水する可能性が高くなります。

また、琵琶湖から流れ出る自然の河川は瀬田川のみであり、琵琶湖は、大雨が降り一旦水位が上昇すると、元に戻るのに長時間を要することから、琵琶湖周辺では古くから浸水被害に悩まされてきました。

2. 水害の記録

滋賀県はかつて近江国といい、都近くに位置していたこともあって、琵琶湖流域の水害に関する記録は、古いものでは701(大宝元)年の「続日本紀」など数多く残されています。明治時代以降の記録は、洪水による被害およびその時の気象状況などについて正確な資料が保存されており、明治時代に約30回、大正時代に約10回となっています。

昭和以降の水害記録を中心に県HP「水害情報発信サイト」(<https://www.pref.shiga.lg.jp/suigaijyohou/index.html>)で水害経験者から聞き取った内容を公表しています。



写真3-8-1 明治28,29年
大洪水の浸水深を記録した
水点標(長浜市田町)

3. 水害の原因

滋賀県の水害は、台風が原因となるものが多く、次に前線・低気圧の順であり、特に、死者と全壊家屋を伴う大災害のほとんどは、台風が原因となっています。また、月別の発生状況を見ると、大半が6月から9月までの間に起こっていて、6月・7月は主に梅雨前線を、8月・9月は台風を原因とするものです。このほか、3月には融雪洪水による被害も発生しています。



4. 記録的な大洪水

(1) 琵琶湖大水害(1896(明治29)年9月)

琵琶湖において記録に残る最大の水害で、琵琶湖水位は、+3.67mを記録しました。湖辺の稲田は全て湖水中に沈み、村落は水没、市街は舟を浮かべて航行する光景が見られました。記録によると、湖辺域のほとんどの市町村が浸水被害を受け、その期間は237日の長期に及んだとされています。



写真3-8-2 当時の様子
(草津市志那町)

(2) 室戸台風(1934(昭和9)年9月)

室戸岬から紀伊水道、滋賀県の西側を通過した典型的な台風で、彦根での最大風速は31.2m/sを記録しました。東海道線瀬田川鉄橋上において、突風にあおられた列車が横転し死者11名を出す大惨事となりました。また、山田尋常小学校の校舎をはじめとする大規模な建築物や、住宅の倒壊など、暴風による甚大な被害が発生しました。



写真3-8-3 当時の様子
(大津市瀬田川鉄橋上)

(3) 伊勢湾台風(1959(昭和34)年9月)

紀伊半島から滋賀県の東側を通過した台風は、彦根で観測史上最低の949.5hpを記録、ほとんど県内全域にわたって平均風速が20m/sを超え、瞬間最大風速は30m/sに及ぶ暴風雨となりました。鈴鹿・伊吹山系では、降水量が300～500mmと猛烈な雨を観測し、県下の河川は、たちまち氾濫・決壊して大洪水が発生、各地で道路が寸断されました。近江八幡の水茎町では、日野川の氾濫により、3mも冠水し、完全排水に40日かかりました。



写真3-8-4 当時の様子
(近江八幡市水茎町)

(4) 台風18号(2013(平成25)年9月)

愛知県豊橋市付近に上陸、東海・関東を東北に進んだ台風は、近畿・東海地方を中心に降水量400mmを超える大雨をもたらしました。滋賀県でも、大津市葛川や東近江市御在所では降水量600mmを超え、全国初の「特別警報」が発表されました。各地で河川の氾濫や土石流、土砂崩れが発生、浸水被害や道路の寸断が相次ぎました。特に、鴨川、金勝川、大戸川では、破堤・越水などによる大規模な浸水被害が発生しました。また、安養寺山では、大規模ながけ崩れによる家屋の倒壊など甚大な被害が発生しました。



写真3-8-5 当時の様子
(栗東市目川町)